



明治大学

黒曜石研究センター ニューズレター

Center for Obsidian and Lithic Studies News Letter

No.7, September 2016

巻頭言

阿部 芳郎

明治大学黒曜石研究センター センター長



このたびセンター長に着任しました文学部考古学専攻専任教授の阿部芳郎です。本センターは2010年に研究・知財戦略機構の付属研究施設として設置されました。これまで5年間の大型研究を通じて、黒曜石の産地推定に関する技術開発と黒曜石研究を中核とした学際研究を推進し、国際的にも高い水準の分析手法の開発に成功し一定の成果を収めることができました。これらの研究の成果をふまえ、人類史を照射する多視点的な分析研究の構築とその展開が次なる課題と考えています。

ところで本センターに期待されている重要な役割の1つは、研究成果を学部・大学院の教育に還元することです。そのための具体的な方策として今年度から学部・大学院教育を充実させるための太いパイプとして、駿河台地区の猿楽町分析室を研究・教育の拠点として位置づけました。そして先史考古学・動物考古学・植物考古学・人類学・同位体生態学・応用有機化学等の研究を専門とする5名のセンター員に新たにご参加いただくことになりました。また文学部だけではなく、理工学部の専任教員も加わることで将来的には学部間での研究連携の場を設けます。

今年度からスタートする新たな研究は、黒曜石とともに遺跡に存在する多種多様な資料を対象にして、個々の資料の相互間の関係性を読み解くというものです。具体的には約9000年前の縄文時代早期を対象に、センターのある中部高地と東京湾沿岸地域の比較研究を開始します。両地域は1000mほどの標高差があるほか、太平洋岸では温暖化により海水面が上昇し、東京湾が形成される時期に相当します。温暖化にともない成立したといわれる縄

目次

- ◆ 巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
阿部芳郎
- ◆ 2016年度スタッフ・組織・・・・・・・・・・・・ 2
- ◆ 2016年度スケジュール・・・・・・・・・・・・ 2
- ◆ 新センター員の自己紹介・・・・・・・・・・・・ 2-3
佐々木由香, 谷畑美帆, 樋泉岳二, 本多貴之, 米田穰
- ◆ 猿楽町研究室の紹介・・・・・・・・・・・・ 3
佐々木由香, 谷畑美帆, 樋泉岳二
- ◆ 池谷センター員が旧石器学会賞を受賞・・・・・・・・ 3
- ◆ センターを利用した大学院授業の実施・・・・・・・・ 3-4
橋詰 潤
- ◆ 考古学とジオパーク：2つの行事から・・・・・・・・ 4
橋詰 潤
- ◆ 黒曜石研究センター資料・報告集刊行のお知らせ・・ 4
- ◆ 編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

文文化も中部高地と海浜部では大きく異なる資源環境が存在したのです。本研究はこの2地域を比較の柱として、両地域の遺跡から出土する土器や石器、動植物遺体、人骨などを対象とした多視点的な研究を推進し、人類の環境適応の多様性を解明するものです。

この枠組みの中で黒曜石の研究はとても重要です。黒曜石とは縄文時代では主に石鏃の素材として利用されるため、広域に流通した黒曜石は、狩猟活動の中でその意味を考えることによって、はじめて資源としての性質を読み取ることができるのです。つまり、資料に多視点的な科学の光をあてることによって、歴史の中での存在意味を考える視点が必要なのです。

学際研究という用語が意識されるようになってから30年以上の歳月がたちますが、単に文系や理系の研究を総花的に並べただけでは、新たな価値観や研究は生まれません。様々な視点からの議論を蓄積し、寄木細工のような複雑な現象を読み解き、それらの理解と説明が化学変化のように連鎖する斬新な研究を展開したいと思います。そして研究の立案から展開に至るまでの過程を学生たちと共に体感することは、本研究所ならではの学びの場となるに違いありません。

2016 年度スタッフ・組織

センター長：阿部芳郎（明治大学文学部教授）
客員教授：中村由克（明治大学研究・知財戦略機構）
特任講師：橋詰 潤（明治大学研究・知財戦略機構）
特任講師：真島英壽（明治大学研究・知財戦略機構）
特別嘱託職員：遠藤英子（明治大学研究知財事務室）

センター員（50音順）

池谷信之（研究・知財戦略機構客員研究員）
 佐々木由香（パレオラボ統括部長）
 島田和高（明治大学博物館学芸員）
 諏訪 順（小田原市観光課小田原城天守閣館長）
 須藤隆司（研究・知財戦略機構客員研究員）
 大工原 豊（國學院大學兼任講師）
 谷畑美帆（明治大学文学部兼任講師）
 土屋美穂（明治大学研究・知財戦略機構特別嘱託職員）
 堤 隆（浅間縄文ミュージアム主任学芸員）
 樋泉岳二（明治大学文学部兼任講師）
 藤山龍造（明治大学文学部准教授）
 本多貴之（明治大学理工学部講師）
 吉田英嗣（明治大学文学部准教授）
 米田 穰（東京大学総合研究博物館教授）

運営委員会

阿部芳郎 委員長
 真島英壽 副委員長
 大竹憲昭 委員（長野県立歴史館）
 笠松浩義 委員（明治大学研究推進部長）
 矢島國雄 委員（明治大学文学部教授）
 吉田邦夫 委員（東京大学総合研究博物館特招研究員）

事務担当

河野秀美（明治大学研究知財事務室）
 小林慶吾（明治大学研究知財事務室）

新センター員の自己紹介

佐々木由香

このたびセンター員に着任いたしました（株）パレオ・ラボの佐々木由香と申します。専門は植物考古学です。人間がどのような植物資源を利用したかに注目して、種実利用や、ノビルなどの鱗莖利用、編み物などの編組製



品利用、土木材などの木材利用から当時の人々の資源利用の視点を解明していきたいと考えています。センターではさまざまな資源を研究する研究者がいらっしゃるの、お互いの専門を生かした共同研究を進めたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

谷畑美帆

2016年度よりセンター員として着任した谷畑美帆（Miho TANIHATA）です。これまで日本国内外のさまざまな遺跡（縄文時代から江戸時代まで）から出土した資料を用いて研究を進めてきました。黒耀石研究センターには様々な専門分野の方々がいるので、皆様から良い刺激をいただきつつ、自らも貢献してゆきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



樋泉岳二

専門は「動物考古学」です。遺跡から出土する動物遺体（貝殻や動物骨など）の分析を通じて、過去の食生活や生業・資源利用、人と自然の関係性の歴史を解明することが研究テーマです。これまで、おもに日本列島～琉球列島を対象として、「貝や骨が出るなら、いつの時代でも、どこの遺跡でも分析する」を基本方針として研究してきました。また、自然史系諸分野の方々との交流の中で「学際研究」の楽しさと難しさも経験してきました。黒耀石研究センターでは、これまでの経験を活かし、より多角的な「人と資源環境の関係性」の解明に貢献できればと思います。よろしくお願いいたします。



本多貴之

2016年度より新たに黒耀石研究センターのメンバーに加わることとなりました。本多貴之と申します。阿部芳郎センター長とは、縄文の漆に関わる研究を10年来行わせていただいております。漆のみならず様々な天然資源の利用を科学の目から解き明かすことを目的に



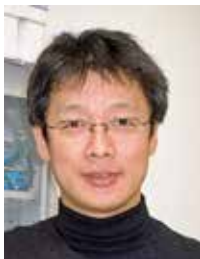
2016 年度スケジュール（※暫定版、スケジュールの更新および詳細についてはセンターホームページをご参照ください）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
調査, 研究										ロシア、オシボフカ文化資料調査		
シンポジウム, 研究会など			● 日本考古学協会総会、セッション5「ジオパーク活動と考古学—その役割と可能性—」	● 国際黒耀石会議（イタリア、リバリ島）	● ジオパークシンポジウム：考古学、人類学、土壌学の視点から	● 国際会議：East Meets West The archaeology of flint and obsidian（イギリス、ノーフォーク州セトフォード）	● シンポジウム：縄文文化の繁栄と衰退～生業の特殊化と社会複雑化～	● シンポジウム：学際研究のいま～学際研究は縄文文化をどう描くのか～	● シンポジウム：国史跡が拓く縄文の社会			● センター運営委員会
出版							● ニュースレター7号				● センター紀要第7号、ニュースレター8号	
長和町関連事業など												
関連学会など	● 日本地球惑星科学連合2016年大会		● 第8回アジア旧石器学会大会		● 黒耀石のふるさと祭り	● 日本地質学会第123年学術大会	● 日本第四紀学会2016年大会	● 日本火山学会2016年度秋季大会				

研究を進めております。縄文時代の資源利用は、私たちが考えるよりもずっと高度かつ複雑だったことに感銘を受ける一方で、なぜそのようなことをしたのか？という大いなる謎に挑むことも多くあります。よろしくおねがいいたします。

米田 穰

このたび、黒曜石研究センターにセンター員として参加させていただくことになりました米田 穰です。主に骨の化学分析を用いた自然人類学の研究を行っています。骨の分析によって、年代や食生活、移動履歴などが明らかにできますので、黒曜石をはじめとした先史時代の資源利用についてヒトや動物の骨・歯の分析から迫りたいと考えております。本務は、東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室です。



猿楽町研究室の紹介

今年度から、黒曜石とともに遺跡に存在する多種多様な試料を分析可能な研究室として新たに整備を始めた、黒曜石研究センター猿楽町研究室での研究を紹介します。

佐々木由香

今年度から、植物考古学研究室がスタートしました。猿楽町研究室では、土壌の水洗から植物遺体の同定、撮影、保管までを行うための機材が揃っているため、遺跡出土試料を用いた植物遺体の研究を進めていく予定です。今年度は、縄文時代の貝塚や台地上の遺跡を対象として炭化種実やレプリカ法による土器圧痕資料を分析する予定です。これまでの植物遺体の研究は、残りがよい低湿地遺跡を主な対象としており、貝塚などではあまり植物遺体の検討は行われていません。動物遺体を分析する遺跡と同じく植物遺体も検討し、当時の食生活や資源利用を検討していく予定です。将来的には、遺跡の土壌水洗や植物遺体に興味を持つ学生や埋蔵文化財担当者に向けた講座なども開催したいと考えています。



谷畑美帆

私の対象とする資料は人間そのものである人骨です。そしてそこに残された病気の痕跡を手掛かりに当時の人々の生活を探るといものになります。現代社会に生きる私たちの骨格と縄文時代の人々の骨格を比較してみると後者の方々のがっしり感に圧倒されます。添加物がなく旬のものを食べていたであろう縄文人は私たちが想像する以上に健康だったのかもかもしれません・・・今年度は昨年度にひきつづき、骨病変の出現頻度から縄文時代以降の環境適応に伴う健康状態を考察するという大テーマに挑みます。そのため、これまで教育委員会や発掘調査機関などからさまざまな時代の資料をお預かりし、鑑定を実施してまいりました。昨年度は西ヶ原貝塚出土人骨（縄文）および黒袴台遺跡出土人骨（中世）、また現在、三重県志摩市塚穴古墳出土人骨（古墳時代）を教育委員会からお



預かりし、整理作業を進めております。過去の社会を文化財科学・考古学・人類学の視点から、人骨を通して、考察していきたいと考えております。

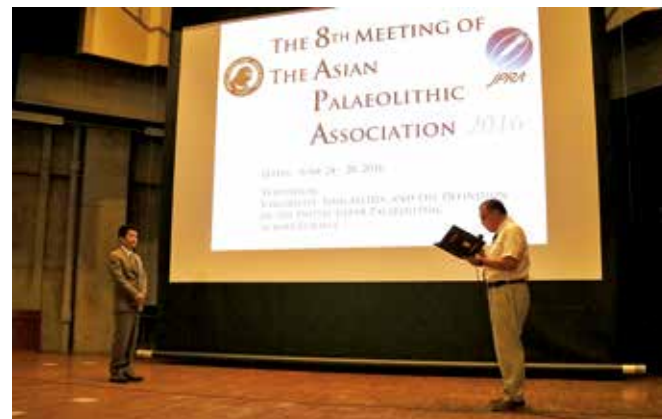
樋泉岳二

研究室で行う具体的な分析作業は、①遺跡から出土する動物遺体の同定、②貝殻成長線分析です。動物遺体の同定は現生標本との比較によって行います。このため、より正確な同定には現生標本の収集・蓄積が必要です。現在はこれまでに収集した標本を運び込んで研究していますが、これから現生標本の収集・作製も進めていきたいと思っております。貝殻成長線分析は、二枚貝の貝殻断面にみられる微細な縞模様を読み取ることにより、貝の年齢・成長速度や死亡季節を推定する手法で、貝の採集季節や資源管理の実態を明らかにするのに有効です。今後は必要な機材などの整備を進め、動物考古学の研究および学生への教育普及に活用していきたいと考えています。



池谷センター員が旧石器学会賞を受賞

黒曜石研究センター員の池谷信之氏に2015年度『日本旧石器学会賞』が授与されました。2013年度の堤隆氏、2014年度の須藤隆司氏に続く、センター員の3年連続受賞の快挙となりました。



授賞式の様子（2016年日本旧石器学会総会にて、左側が池谷氏）

センターを利用した大学院授業の実施

橋詰 潤

7月9日～11日に、センターを利用して明治大学文学研究科「総合史学研究VI」が行われました。ポータブル蛍光X線分析装置（P-XRF）を用いた尖石縄文考古館所蔵資料表面の赤色顔料の分析や、黒曜石体験ミュージアムと星糞峠黒曜石原産地遺跡、麦草峠黒曜石原産地、広原湿原と広原遺跡群、八島湿原と星ヶ台黒曜石原産地などの見学と踏査を行いました。受講者はセンターによる、「人と資源環境」の関係解明を目指す研究について実習を交えながら学びました。さらに、中部高地における旧石器～縄文

時代の黒曜石資源利用について、遺跡や原産地を実際に踏査しながら、研究を今後どのように進めていくべきかについて話し合いました。こうした機会をきっかけに学生による学際的研究や、黒曜石研究センターとの研究の連携が進むことが期待されます。



P-XRF 実習風景 (尖石縄文考古館にて)

考古学とジオパーク：2つの行事から

橋詰 潤

ジオパーク (GP) は「大地の公園」と意識され、地球科学的な価値を有する資産を見どころとする。さらに、GP では地質遺産だけでなく、地球と人との関係も重視している。人と地球の関わりを歴史を描くことができる分野として、考古学が GP に可能な貢献や、地球科学的視点を取り入れた研究や遺跡の活用などが考古学にもたらすメリットは、それぞれ大きい。ここではこうした動向を踏まえ、センターが関わって開催された2つの行事を紹介する (プログラム等の詳細はセンターホームページを参照下さい)。

5月29日の日本考古学協会大会のセッション「ジオパーク活動と考古学—その役割と可能性—」では、GPに考古学が果たし得る貢献と、GP活動による新たな考古資産活用の可能性について、GPにかかわる考古学者による講演と議論を行った。会場には、考古学者だけでなく GP 関係者も集まり、考古学者の GP への関心、GP 側の考古学への期待、それぞれの大きさが感じられた。6月19日には明治大学で、日本第四紀学会主催のジオパークシンポジウムが開催された。本シンポジウムの特色は、地球科学的な価値を持つ構成資産が中心となる GP において、中核をなすことが多い地質、地形、火山、地震などの研究分野ではなく、考古学、人類学、土壌学をあえて中心にして、GP のすそ野を広げること



6月19日ジオパークシンポジウムの討論での1コマ

を目指した点にある。討論では、第四紀学が GP に可能な貢献や GP が各研究分野にもたらすメリットについて指摘がなされた。

このように、GP ではよりすそ野の大きな活動が求められつつある。さらに、GP への関与が各研究分野にもたらすメリットについても議論が進みつつあり、今後のさらなる展開が期待される。

黒曜石研究センター資料・報告集刊行のお知らせ

黒曜石研究センターによる研究成果を公表するための新たな書籍シリーズとして、『明治大学黒曜石研究センター資料・報告集』の刊行が始まりました。第1号 (写真左) は長野県長和町の広原湿原および周辺遺跡での考古・古環境調査の成果が、第2号 (写真右) はロシア連邦アムール川下流域での調査の中間報告が掲載されています。第1号、第2号ともにセンターホームページで閲覧と PDF のダウンロードが可能です。是非、ご利用ください。



編集後記

本号ではセンター長の交代や、新センター員について紹介を行いました。新体制でも2016年3月に無事終了した、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「ヒト—資源環境系の歴史的変遷に基づく先史時代人類誌の構築」等での研究成果を継続、発展させるとともに、これまでになかった新たな研究についても精力的に進めていきます。今後ともご協力、ご指導をいただけますようお願いいたします。今後も当センターの活動は、ホームページ (担当: 河野) や Facebook (担当: 土屋、眞島) でも随時発信しますので、是非ご覧下さい。皆様からの情報もお待ちしています。(JH)

明治大学黒曜石研究センターニュースレター 第7号

発行日：2016年9月15日

編集：橋詰 潤

発行：明治大学黒曜石研究センター

〒386-0601

長野県小県郡長和町大門 3670-8

電話：0268-41-8815

URL：http://www.meiji.ac.jp/cols/

FB：https://www.facebook.com/明治大学黒曜石研究センター

-564680010333699/

印刷：中澤印刷株式会社

〒386-0002

長野県上田市住吉 1-6

電話：0268-22-0126



※当センターでは施設の固有名義として「黒曜石」の表記を使用しています。